

1990年代の流行動態

— ストリート・ファッションの特徴とその本質 —

村田 仁 代*

【要 旨】 現在、服飾研究のなかでストリート・ファッションに関する問題は重要視せざるをえない。それは流行をリードしてきたデザイナー界において、従来のモードに、ストリート系と呼ぶジャンルを新たに設け、若者間で次々と創出される着装形態をイメージにして作品を発表する状況が見られるようになったためである。ストリート・ファッションが広く流行するようになったのはモードの鉄則を崩したミニスカートに端を発するが、それ以降、流行動態が以前の浸透状況に変化をきたすようになったことは既出論文で明らかにしてきた。すなわちミニスカートは従来のデザイナー主導の流行形態を後退させた注目すべき出来事として捉えることができる。その流行から30年程を経たが、現在のストリート・ファッションにはミニスカート流行時と異なる特徴が見出される。ミニスカートは若者から壮年までに及び大流行となったが、今日のストリート・ファッションは広い流行を見ることなく、若者層を中心とした個性化を標榜する現在の多様な着装傾向を満足させる各種のファッションイメージの一つとして存在すると言えよう。

【キーワード】 ストリート・ファッション 現代服飾 アンチ・モード

はじめに

1990年代の流行動向を特徴づけるものとしてストリート・ファッションを挙げるができる。直訳すれば街頭の流行となり、広く街で見られる服飾全般に及ぶが、本論で取り上げるストリート・ファッションとは狭義のものであり、アンチ・モード、すなわちデザイナーの創作活動から生み出されたものではなく、若年層が意識的に従来のモードの概念を打破することを目標において着装するファッションである。

そのため、デザイナーの動向を主軸としてファッション界の展開を編年史的に論及する視点では、その特徴や本質を把握することができない。それは単に発生の過程がプロフェッショナルであるデザイナー主導の状況でないためというだけでなく、若者を中心に見られるストリート・ファッションの論及には、着装形態を明らかにすることに加え、社会規範、社会的価値基準等との関わりを通じて研究する視点が要求されるからである。

平成10年9月27日受理

*むらたまさよ、大分大学教育福祉科学部被服学教室

特に社会との関連性を追求することはストリート・ファッションに限らず、流行を時空間的に取りあげる服飾研究には是非とも求められることといえよう。いうまでもなく社会には服装をはじめ、様々な流行が生起するが、その状況について上田篤氏は「流行の対象とするところはひろいけれども、そのもっともポピュラーで、かつ流行性のいちじるしい、つまり社会的に変化のはげしいものは、(中略)服飾の世界といえる」という見解を示している¹⁾。ゆえに、流行現象は表層の服飾形態の変化の研究に留まらない重要な研究対象としての意味を持つ。流行は伝統的生活を基盤としながらも、しばしばその伝統的な社会規範と対立して生起する²⁾。すなわちある時期に従来の社会規範に反発する考えが一部におこれば、それが流行に投影されることがあると考えてよい。すなわち服飾の流行は社会世相を反映するものである。あえていえば、服飾は社会世相を具現化したものである。そこで本論では現代のストリート・ファッションの着装形態を、社会との関連を通じて論及する。そのため、本論では専門性を持つファッション雑誌に限定せず、広く不特定層を対象とし、社会の状況を速報する新聞記事も渉猟し、考察を行う。

I ストリート・ファッションとモード

ストリート・ファッションをアンチ・モードであると前記したが、今日のファッションを大別するとストリート系に対置して、モード系(あるいはクチュール系)があげられる。後者はフランスをはじめとするデザイナー・コレクション等で見られるトレンドを特徴としたものであり、前者は「街に集まる若ものたちの中から、自然発生的に生み出されるファッション」である。両者の関係をファッション関係者は「かつてファッションは上流社会の中で生まれ、それが一般大衆へドロップダウン(滴下)していったものだが、第2次世界大戦後は街の中から生まれるファッションが幅を利かせるようになり、とくに1990年代はストリート・ファッションの時代と呼ばれるまでに大きく成長し(中略)いまやファッション・トレンドの一大源泉として無視できなくなっている」と記述している³⁾。そこで渋谷・原宿・代官山などで、「若いスタッフがストリートの若者に近いところで服作り」をするストリート・ブランドという新しい流行の作り手が登場し急激に人気を伸ばした⁴⁾。

上記のようにストリート・ファッションがファッション界で大勢を占めてきたため、逆にデザイナーやアパレル企業がストリート系のファッションを盛んに取り入れることとなり、モード系ストリート・ブランドが見られるようになった⁵⁾。小売店においても「有名なデザイナーがいて、そのブランド名で売るといふデザイナー志向」ではなく、オリジナル商品で「あくまでも街を歩いている人に目を向けたファッションビジネス」を目指す状況も見られることとなった⁶⁾。

上記のようにストリート・ファッションはモード系に組み入れられる結果になったが、その関連を柏木博氏は「若者たちの集団の中から自然発生的に広がるストリートファッションは、出現した瞬間、無秩序に氾濫していく力を感じさせる。ストリートファッションはモード(形式、様式)化されたものに対するデモード(脱モード)を無意識に反映する。しかし、それも瞬間的なことであって、たちまちそれは定着し市民権を得てモード化されることになる」と解説している⁷⁾。要するにストリート・ファッションは従来のモード系のデザイン上の原則を無視し創造されるもので、その発想がモード系に組み入れられれば、表現パターンの一つとなり

脱モードであったことは過去のことになるのである。

ストリート・ファッションがハイファッションのモードに採用されたことを示す例は、以下のロンドン特派員の記事にも見つけることができる⁸⁾。

・英国のストリート・ファッションが一段と進化した。98年春夏物の「ロンドン・ファッション・ウィーク」では、独特のくせの強さがすっかり浄化され、蛍光塗料的な色遣いなど「ストリート」のエッセンスがハイファッションに浸透。新たに「ファンキーシック（ストリートとクラシックという相反する二つの要素を持つ—村田注）」と言うべき境地に到達した。

・ストリート特有のやぼったさが（中略）ハイファッションに迫っていた。いつもの「くさい」色遣いがろ過器を通してあくをとったように透明に変化した（傍点—村田）。

上記の記事ではストリート・ファッションがモード系に変化する操作上の過程を明らかにすることができる。図1に示した菱沼良樹氏の97/98年秋冬のモードでは、編み上げたのち、後処理で縮絨加工を施したウールのニットには、胸の十字の切れ目に安全ピンが留められ、ストレッチの合皮素材を開発して造ったスカートとストッキングが組み合わせられている。スカートは一端造った後、アトランダムに畳んだ状態でヘビ革の合皮の皮膜を部分的に重ね、独特の素材感を強調している。ジッパーを大きくあけたスカートは深いスリット状になり、腰のベルトから吊した合皮のストッキングを際立たせた着装である。このように、パンク・ファッションがモードでは洗練されたゴージャスな表現となっている。

すなわちプロフェッショナルであるデザイナーはその転化の段階でストリート・ファッションをあくまでもイメージとして捉え、材質・色彩・フォルム・縫製技術・付加物等の細部まで、すべてを考慮に入れて、洗練させて新たなモードに仕上げることである。その根底には造形美の追求があることは言うまでもない。

モード系に昇華された代表例としてクチュール・アヴァンギャルドが挙げられる。このファッション表現は「オートクチュール感覚で創り出すアヴァンギャルド（前衛的）といった意味」であるが、「グランジ・ルックやパンク・ルックなどのストリート・ファッションを、オートクチュール特有の高度な造形感覚で表現しようとする傾向をいったもの」である⁹⁾。

II モード化の事例

パリエコレクションなどで取り上げられたグランジはもともと90年代初頭、世界の雑誌や新聞で話題となったが、グランジ（grungy）とは汚い・悪い・劣ったという意味で用いられるア

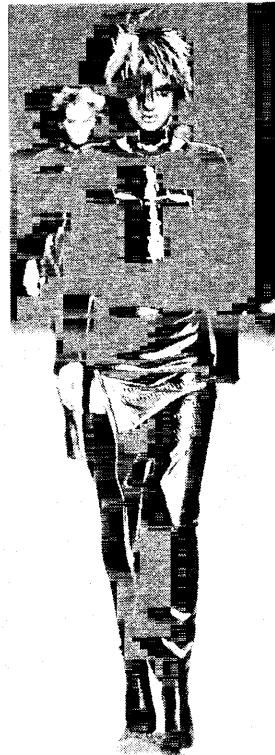


図1 モードとしてのストリート・ファッション

ハイテクの技術を駆使しながらも手作りの味を出した素材で、パンク・ファッションをゴージャスなモードに仕上げている。
(YOSHIKI HISHINUMA
毎日新聞1997年9月5日夕刊)

メリカの新俗語である。流行の発端は米国のシアトルで生まれたグランジ・ロックと呼ばれるバンドの「汚いだみ声やギターをかき鳴らす音の感じと、貧乏で何日も風呂に入らずくしゃくしゃの服を着たミュージシャンたちの外観から名付けられた。音楽のヒットとともにストリート（街の）ファッションとして、ニューヨークを中心に世界に広まった¹⁰⁾。この「グランジ調」はパリやミラノ等のコレクション等に登場し、日本のデザイナーたちもその作品を発表した。新聞記事¹¹⁾によると、川久保玲氏は「スーツ地と薄布などの異素材をハギ合わせたり、柄の一部を脱色した」りした。三宅一生氏は「カギザキを修理したように見える刺しゅうや、わざとムラ染めにしたベロアのシャツなどを発表。またシワ加工」したものを発表した。また永沢陽一氏は「安じゅうたんのような素材のロングスカートやコートを発表した。いずれも裾は切りっぱなし、合わせるものはTシャツの重ね着などで、「反ぜいたく」のムードを主張」した。以上のデザイナー達のファッション傾向を、記者は「『ボロの重ね着』や『つぎはぎ服』のイメージから出発して、それをバブル期の豪華ファッションの対極にある清新な世界に育てつつある」と結論づけている。

この結論から、前に述べたようなストリート・ファッションがモードに転化する経緯を実証することができる。すなわち、デザイナー達はファッションイメージの領域を拡大させるため、グランジという新規のイメージに取り組んだと言える。また社会状況を踏まえ、不況と言われる時期に合致する時代性を持つことから注目したと考えられる。ファッションイメージは米国のミュージシャン達の着装傾向に端を発するといっても、デザイナー達の創作したものが彼らの見るからに「汚らしい」という服装とかけ離れたものとなったことは想像に難くない。デザイナー達はあえて裾の処理をしない、わざと色ムラをつくる、異種の生地を繋ぎ合わせる等、あまり見られなかった素材・縫製法を用いて、各服種にわたり従来とイメージの異なるものを作りだしたと考えられる。おそらく、一般購買者は全身のあらゆる服種を同イメージのものにして着装するにはいたらず、一部の服種に採用し、他のイメージの服種と組み合わせることで着ることだろう。このことは各自が各服種の取り合わせを行うのが現在の一般的な着装傾向であることから述べることもできる。

前にストリート・ファッションがモードと化した代表的なものとして、グランジと共に、パンク・ファッションを挙げた。パンク (punk) とは「1970年代後半、ロンドンで始まり、世界中にセンセーションを巻き起こした若者風俗で、不況下のイギリスで失業中の若者たちが、そのはけ口として、音楽やファッションを通じて過激な若者文化をうみだしたその運動を指す」のである。パンク・ファッションは「革ジャンやTシャツを破いたり汚したり、すべての既成概念を無視し、抵抗した」ものを言う¹²⁾。「アクセサリーには鎖や錠前などを使い、ヘアスタイルも、モヒカン刈りやスキンヘッドなど、特異なスタイルとしても知られる¹³⁾」。いわゆるファッション界では「過激なイメージの不良ファッション」と見られ、「それまでの上品服に替わる新しいファッションの流れとして注目され」て、「91年～92年秋冬のパリ・コレクションにあらわれ」、「シンプル・パンク (simple punk) と呼ばれた¹⁴⁾。このようにグランジと同様に、パンクもファッション界でイメージの拡大のために注目されるようになったと言ってよい。

III ストリート・ファッションの現状

90年代に注目されるようになったストリート・ファッションとして、日本ではどのような着装形態が見られるようになったのであろうか。イラストレーターのリリー・フランキー氏とスタイリストの吉田浩彦氏の対談にはストリート・ファッションとしてアメカジ、グランジ、フレカジ、フレロリ、クールアイビー、スケーター、ボーダー、ライダーズ、スーパーモデル、田舎モード等が挙げられている¹⁵⁾。

アメカジは上衣として米国空軍の防寒用フライトジャケットやスタジアムジャンパー等、下衣にジーンズやチノパンツを着け、そしてスニーカーやワークブーツを履く。流行の初期には「わざと着古した感じにして、より自分っぽいもの、人とちょっと違ったスタイルを作る。たとえば(中略)帽子をライターで焼いて焦げ目をつけたりとか」して、「味出し」という方法が採られた。

グランジは「Tシャツにカットオフしたジーンズやスウェットパンツ。腰にはネルシャツを巻く」ようなスタイルを指す。

フレカジすなわちフレンチ・カジュアルは「ジャケット、カットソー、ボーダーのTシャツ、ホワイトジーンズなど、シンプルな定番アイテムの組み合わせが特徴」であり、「いわゆる山の手ファッションといわれるビームス、ユナイテッドアローズの服に代表されるファッション」である。

フレロリすなわちフレンチロリータは「ハデな色使いや過激なまでにかわいらしさを演出するのが特徴」で、「スクールガール風から年齢不詳の少女趣味までバリエーションがいくつかある」。

クールアイビーとは「Vゾーンの狭いジャケット、細身のパンツ、今風の髪形、サングラス、トラッド以外の靴」等を着けたスタイルを指す。

スケーターは「スケートボードのブームとともに現れた」もので、「その流れを受けてスノーボードブームとともに登場したのがボーダー」である。「両者ともにXLサイズの服で全体的にダブっとしたシルエットを出すのが特徴」である。ただし、スケーターは「季節柄、チビTシャツも愛用」することがあり、「パンツやへそを出すのも流行」させた。

ライダーズはバイカーズファッションのことで、「革ジャンが基本アイテム」で、革パンツ、ブラックジーンズにエンジンブーツやウエスタンブーツ等を用いることが多い。

スーパーモデルは「もともとオシャレに敏感でトレンドをいち早く取り入れる人たちのファッション」で、「パリコレなど世界的に有名なファッションショーに登場するモデルたちのスタイルを真似たり、彼女たちと同じブランド



図2 大学生に定着しているストリート・ファッション

オーバーサイズのTシャツ、パーカー、ジーンズ姿の典型的ボーダーとウエスタン系チビTシャツの学生。(大分大学構内1995年10月)

を好む」ことが多い。

田舎モードは「全体的なコーディネートよりも一点豪華主義で勝負する」。それは「服でも指輪でも靴でもバッグでもいい。とにかく一点にファッションリビドーを集結させることが大切」である。

以上のように対談に登場するストリート・ファッションとは、前節でモード系とストリート系との関連で取り上げたグランジ、パンクのイメージに限定せず、さらに多種多様な、広範囲にわたるものである。他の雑誌記事でストリート・ファッションとして掲載されるものも多岐に及ぶことが多い。ゆえに上記の各種のスタイルを含むものをストリート・ファッションとするのが一般的な捉え方と言えよう（図2参照）。

Ⅳ ストリート・ファッションの着装意識

それならば広義のストリート・ファッションはどのような傾向から一つの範疇にくくられているのか検討しなければならない。まずそれらの着装状況を見た場合、多くが「何々カジ」と呼ぶことからわかるように、カジュアルなファッションを常に着用できる若者主体のものである。まだ社会的な責任を持たない立場の層であるため、服装に自由さの見られることは言うまでもない。画一化された「大人社会」の一員になる前に充分、自由さをエンジョイしようという意識を、服装で表現しようとしていることは想像に難くない。各人が「大人社会」とどれだけ距離をおこうとするかによって、若者間の服装にも差がでていると考えてよい。距離を置くために社会の特異な空間で活躍するミュージシャンの服装、特別な場合に着用するスポーツ着を日常着に転用しているのである。

また「大人社会」では特異視されるような華美さ、派手さを強調するのである。さらに「大人社会」の服装形態にないアイテムをコーディネートするに留まらず、前述のような素材自体を古びたように見せる「味出し」という方法まで行われた。このような動向を「地位はないけれど若さはある、お金はないけれど時間はある。音楽、車、店なども取り込んで、そんな若者たちの気分を表現するのがストリート・ファッションだ」という発言¹⁶⁾はこのファッションの性格をほぼ的確に言い当てていると言える。

ところで、若者達は実際に、どのような観念の中から日常の着用状況を作り上げているのだろうか。

ストリート・ファッションの中心である東京原宿のラフォーレ前に自分達で行うファッション・ショーに集まる10代から20代の女性の生態を取材した雑誌記事¹⁷⁾は大いに参考となる。例えば、18歳のある女性はTシャツの上に短いワンピースを重ね着し、その下にジーンズをはいて、手首や袖にアクセサリー、たすきがけにウール地の鞆を下げた姿であるが、Tシャツは古着、ワンピースは普通のジーンズを短く切り、アクセサリーは自分でビーズを通して作ったものである。

その彼女は「お手本? ……歩いている人が全然いい。あと、店員さんとか」、「特にブランドにはこだわらない。男の子にどう見られたいかはあまり考えない」、「個性を出すこと。これ着たい、っていうのを合わせて着る」と答えているが、他の年代の女性は「ミルクボーイ（ブランド名—村田注）は大好き。男の子サイズで着ていて楽し、見た目もかわいい」、「自己マン（満足）。自分の着たいものを着る」、「（彼氏にどうみられるか）気にしない！」

「(ファッションのお手本は)『Cawaii!』とか雑誌」, 「『ダサイカッコしている』学校の級友とは話が合わず, ろくな会話をしていない」, 「ファッションって, 大人たちはたかが洋服ってばかにするけど, あたしたちにはとっても大事。生き方, っていうか, その人の生活の一部。スタイルなんです」, 「着ている服を見れば, 考え方も分かる。自分と似ているかどうか, 付き合えるかどうかとも判断できる」等と発言している。

おわりに

上記の発言や前述の事例から若者を中心とするストリート・ファッションの動向とその着装意識を把握することができる。

まず, 彼らは各種のアイテムと付属品をいかにコーディネートするかを考えることである。これはストリート系に限らず, 今日の着装上の常識であるが, 彼らはとりわけ他人との差別化を図りたいため, 廃番や古着のジーンズ等を求め, 和服や和装品である草履・下駄までも付属品として用いるようになった。また, 上記のようにハンドメイド, 既存の物に手を加える等によって独自のものを身につけることまで行っている。色遣いや文様の大胆なものを用い, 派手さを競うこともなされている。

着装上にも差別化を求め, 従来考えられなかったジーンズやパンツの上にスカートを着けることや, 同じアイテムを重ねることなどがなされている。また従来の男女の性差によるアイテム・付属品を超えて利用されている。現在, 男性のピアスをする状況が見られるが, 極端な場合には女性の服種であるスカートを男性が着けることも珍しくなくなった。

このような現在の状況を分析して, 「おしゃれをするという考え方が違うんです。身だしなみよくとか, 品よく, 知的に見せる気はなくて, 楽しむためのもの。彼女たちは, 自分が楽しければよくて, ゲーム感覚に近い」と言う発言¹⁸⁾は的を射たものである。すなわち従来のコーディネート常識を破ることで, 他人との差別化を図ろうとしていることは言うまでもない。その参考とするためにトータルファッションを重視するモード誌でなく, 街に出て, 他人のファッションを観察することが行われるのである。このことは10~20代を対象とした雑誌がモデルでなく, 一般の若者の街頭での着装を掲載する企画を設けていることから頷ける。

以上のことから現在のストリート・ファッションの構成要素を挙げれば, 1.カジュアル性 2.音楽・スポーツ系 3.無性差 4.非モード 5.コーディネート 6.ハンドメイド性 7.娯楽性 8.個性化等となる。これらの要素の多くはストリート・ファッションだけに見られるものではなく, 現在の一般の着装傾向にも当てはまるものが多いと言えよう。しかし, 重要なことはこの構成要素のバランスがこれまでの着装形態と異なる点である。従来の社会的価値基準や洗練された既存のエLEGANSSを無視し, 娯楽性と意外性に力点を置くことがストリート・ファッションの本質である。

個性化を標榜することがストリート・ファッションの基本であるが, それには若干の補足が必要である。他人と差別化を行うことを希求しながらも, また一方では同じようなファッション傾向を共有する仲間を求めていることは事実である。前に示したように, コミュニケーションをはかり, 孤独感を癒すためにストリート・ファッションが媒介となっていると言えよう。

ストリート系を含むファッションがコミュニケーションとなり得るのは現在, 物質文化を第一義とする考え方が社会の大勢を占める結果と言えよう。

なお今日のストリート・ファッションは若年層に限定されるものだが、90年代の服飾流行に大きく影響を与えていることは言うまでもない。それは広い年齢層に注目されるデザイナーの創作活動がストリート・ファッションから発想されることで証明できる。

注

- 1) 上田篤 「流行とは」『流行の風俗学』 世界思想社 1987年1月 p45
- 2) Mark-Alain Descamps は流行について「習俗や、慣習、伝統に支えられているのであるけれども、これらのものがその古さによって押しつけるものであるなら、流行はそれらに対立する」もので、組織化された流行と自然発生的な流行という対立する二つのタイプの流行が存在する」と述べている。
Mark-Alain Descamps, Psychosociologie de la Mode, Universitaires de France, 1979 (杉山光信・杉山恵美子 訳『流行の社会心理学』 岩波書店 1982年12月 pp11,13)
- 3) 吉村誠一 『97年版ファッション新語事典』 チャネラー 1997年 pp32,15
- 4) アクロス編集室『ストリートファッション 若者スタイルの50年史』 パルコ出版 1995年 p246
- 5) 『Men's Voi』 vol.12 丸井 1997年9月10日 p31, 『CHECK MATE』 講談社 1996年3月 pp69-79
- 6) 小松健樹 「街とそこを歩く人を知らずして真のストリートカジュアルはありえない」『チャネラー』 1997年5月 p66
- 7) 柏木博「バッドテーストを着る」『朝日新聞』 1996年11月28日付夕刊 4面
- 8) 山形優子「98年春夏ロンドン・ファッション・ウィーク ファンキーにしてシック」『日経流通新聞』 1997年10月16日付 11面
- 9) 吉村誠一 前掲書 p8
- 10) 「ばっちいグランジ・ルック ファッション界も注目」『朝日新聞』 1993年3月6日付 18面
- 11) 「93-94秋冬東京コレクションレディースー合言葉グランジ 生活実感にフィット」『日経流通新聞』 1993年4月22日付 28面
- 12) 「わかもの観察学入門 PUNK展 手錠や鎖が好らしい」『毎日新聞』 1993年12月22日付 12面
- 13) 「パンク・ファッション展 安全ピンで学校の制服 黒いごみ袋でワンピース」『東京読売新聞』 1993年11月9日付 19面
- 14) 吉村誠一 前掲書 p13
- 15) 吉田浩彦, リリー・フランキー対談「当世お洋服診断」『東京人』 No.103 1996年4月 pp39-45
- 16) おかむら良「MOVIE, VIDEO 若さがスパークする 映画の中のストリート・ファッション」『ELLE JAPON』 1993年8月20日 p24
- 17) 長友佐波子「メイド イン ストリート」『AERA』 1997年6月9日 pp30-32
- 18) 坂上恭子・田中陽子「巷の若者の?ファッション・グランプリ」『SPA!』 1997年8月6日号 pp36-43

An Analysis of Fashion Trends in 1990's
- The Distinctions and the Essence of Street Fashion -

Masayo MURATA